http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/index.html　令和5年9月15日発行

中北.com

地域教育情報紙

チュウホク ドット コム

中北教育事務所
教育支援スタッフ
〒407－0024
韮崎市本町4－2－4
TEL 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

3

中北の地域社会（community）の心の交流（communication）をめざします

平和を想う夏 ～峡北の地で～

北方領土返還要求運動
関東甲信越青少年交流会

７月２９日～３０日の１泊２日で中学生を対象に第３７回北方領土返還要求運動関東甲信越青少年交流会が山梨で開催されました。初日はシャトレーゼホテルにらさきの森で学習会や交流会が行われ、２日目は総合教育施設いこいの杜「コミュニティーパーク」（雨宮清 代表理事、以下、いこいの杜、雨宮さん）での平和学習が行われ、その様子を紹介します。

北方領土と地雷除去の共通点（いこいの杜での平和学習は、地雷除去について深く学ぶことができます）

両者の共通点は何だと思いますか。そう、ロシアです。ロシアによるウクライナ侵攻が長期化し、地雷敷設が深刻化する中、いこいの杜で平和学習が行われたことに運命を感じざるを得ません。ウクライナ地雷処理チームが１月にいこいの杜を訪れ、１２月には実際に地雷除去機を現地に納入するそうです。

悪魔の兵器ー地雷　兵士だけでなく、罪のない市民も無差別に殺傷する残虐さや、腕や足を失わせ、本人や家族から生きる希望を削ぐ「生かさず殺さず」の状況に追い込むことから、“悪魔の兵器”とも呼ばれます。

学習会・交流会（北海道7名、関東信越各3名程度、山梨24名、総勢56名の中学生と引率教諭が参加）

初日には、北方領土について学び、平和について考えました。北方領土から引き上げてきた方とオンラインで結ばれる場面も。「他県の人達とのグループワークがとてもよかった。様々な考え方があることを知ることができて、自分の世界が広がる貴重な体験ができました。」（山梨参加者）やはり、同年代での交流は意義が大きいのですね。

いこいの杜（北杜市明野・サッカーグランドやアスレチック場も併設）での体験

平和ミュージアムで行われた雨宮さんの講演は、冒頭の暑さへの配慮の話から優しさを感じつつ、圧倒的な説得力で会場を支配。実際に地雷原や紛争地域に赴き、そこでの見聞、感じたことを写真や映像にのせて説明していきます。活動の肝は、地雷除去機（ショベルカーを想像して下さい）をただ提供するのではなく、現地での指導と修理方法の伝達がセットになっているところ。国際援助では高額な機械が壊れたら終わり、という案件をよく耳にします。「今まで納めた機械は全部ちゃんと動いている。」（雨宮さん）さらに地雷除去機の白眉は、アタッチメント（先端部）を替えると通常の重機となること。畑を耕したり、土木作業にも使えたりします。カンボジアで明野のひまわりが咲き誇っている写真がありました。鑑賞用ではなく採油用です。現地では古い油の使用で命を落とす人もいることを知った雨宮さんの配慮。「人づくり」を大切にし「人」をみる雨宮さんだからこそ、重機で地雷を除去するといった実現不可能そうな（対戦車地雷は戦車を壊します）ことが実現に至ったのですね。まとめでの「自己満足ではなく、物作りの原点は、相手が何を望むか考えること、思いやりが必要。いい仲間、ブレーンをつくり大切にすること。そうすると様々なことが可能となる。」説得力しかありません。続けて、ここが「ピースフィールド」に認定された案内板（東中３年小泉彩花さんの絵）の除幕式と名称の由来となったサッカーに興じた後、実際に地雷除去機を見学しました。（写真）

この地に集まった中学生は、この2日間の体験で、沢山のこれからすべきことのヒントを貰って帰ったと確信できます。

いこいの杜を全面的に支援しているのが南アルプス市を拠点とする「日建」（雨宮誠社長）です。地雷撤去の機械においては世界的な企業で、先代の社長であり現会長の雨宮さんが1995年から取り組んでいる事業です。スポーツにも力を入れています。いこいの杜に興味をお持ちの方、問い合わせ先はこちらです　℡　０５５１－４５－９５２６

絵本の続きは？ 何に変身したのかな？？

山梨県立盲学校

「カラバット、カラベット、へ～んしん（変身）！」最初は遠慮がちだった児童も徐々に声が大きくなっていきます。７月３日、山梨県立盲学校（白倉明美校長）小学部で、イタリア全国視覚障がい者支援施設連盟で教材制作や読書普及を行うピエトロ・ヴェッキアレッリ氏を招き、森泉文美氏の通訳（とても絶妙です）で、『手でみるプロジェクト』朗読会とワークショップが開催されました。

イタリアを紹介した後、触る絵本『へんしんどうぶつジョルジェット』を朗読していきます。この絵本には様々な素材が貼り付けてあり、児童は聞くだけでなく触れて鑑賞ができるのです。絵本の主人公ジョルジェット君は、冒頭のおまじないで、ぶつかったものに変身します。例えば羊に変身すると、児童達は絵本に貼り付けてあるふわふわの白い素材に触れて絵本をよみます。さらに、「日本で羊は？」「メー」「イタリアでは『ベー』と鳴くよ。」と、単に読み聞かせだけでなく、文化の違いも気づかせてくれます。

いよいよ本番。後半のワークショップは、なんと、事前に準備してあった色とりどりの様々な素材を使い、世界に一つだけの、絵本の「続き」の作成です。なんて素敵なんでしょうか。児童達は先生たちの手を借り、様々な素材を用いてチャレンジしていきます。「海に行って、砂場に石ころでつまずいて転んじゃって、海の中に入っちゃって、貝殻いっぱいついちゃった。」と、ジョルジェット君の変身物語が続いていました。子どもの感性は本当に素晴らしいですよね。今日のような実際に触ることは貴重な体験とのこと、小さいときに「砂」というものを経験しておくと、成長しても言葉として理解ができるという説明がありました。「触る絵本は、見える見えないに関係なく、触りながら一緒の時間を過ごすことや人と人との関係をつくることができます。皆さんにもぜひ体験していただきたいです。」（白倉校長）　限られた時間ではありましたが、このようなプロジェクトの貴重さや、本の持つ魅力や可能性を再認識させられました。

児童のつくったジョルジェット君は、10月20日から3日間、県立図書館において山梨県立大学・山梨大学・山梨県立盲学校共催の「ふれてみる展覧会2023」で展示されます。会場で実際に触れて楽しみましょう。

地域一丸で高める防災力

昭和町・昭和町立押原中学校

８月２７日、昭和町の各地区の自主防災会が押原中（古屋正樹校長）の生徒と防災訓練を行いました。これからの地域防災や地域のあり方について、非常に示唆が多く、意義深い試みに思わず唸らされました。

西条二区では、地域住民と中学生を３グループに分け、初期防火訓練として消火器の使用、消火栓使用訓練として消火栓から放水する訓練、炊き出し訓練として、カレーを調理する３つの訓練をローテーションで実施。中学生は自分の住む地域の水利など知る由もなく、地区で実際に消火栓から放水する意義は非常に大きいと感じざるを得ません。また、炊き出しもレトルトではなく、実際に中学生も調理したりと、ウイズコロナを感じます。食材を手にする中学生は真剣そのものです。

押越区ではDIG（実際の地図に直接必要な情報を書き込み危険性を見える化したもの）を用いた発表会を見学。押原中の２年生が総合的な学習の時間を用いて各地区毎に作成した成果の発表です。地区での防災拠点、液状化する場所、安全な場所など非常に具体的な指摘。「災害の対応は一人では限界があります。地域のみんなで協力することが大切です。（生徒）」生徒も真の意味で真剣に地域学習ができ、地域の方も大変参考になったはずで、皆のためになる発表でした。

実施にあたり各地区で事前に打合せを実施。地区の方も中学生の力に期待しているようです。古屋校長は「学校は地域の方に支援していただくことが多いが、そうではなく、地域に貢献できる生徒・学校になることを合い言葉にしています。」防災訓練での生徒の動きからはその意図が強く感じられました。地域の問題や教育を地域の力で解決していったり、よりよくしていったりできるようになったらいいなと思えた日曜でした。

おやさいとれたよ！「保育園教育ファーム」　北杜市立須玉保育園・南部こども園

明るく開放感あふれる大きな園庭、ゆったりと作られた建物が目に飛び込んできます。７月の暑さ厳しい中、須玉保育園（大久保初美園長）の園の脇にある農園で収穫作業が行われました。指導は農家の諸橋由理子さん。今年度から須玉保育園の事業に従事し、普段は夫である正達さんと一緒に指導しているとのこと。

さあ、収穫です。元気いっぱいの年長さんの参加です。諸橋さんが「皆さんがお水をあげたりして育ててくれた野菜を収穫します」「は～い」最初はジャガイモから。「大きなジャガイモとれるかな～」、「せんせーイモがぬけなーい」「ぜんぜんとれないよ～」「こんなちっちゃいの～」「これぼくのだよ」先生が「みんなで育てたお芋だから、一緒にバケツに入れようね～」とすかさず指導。流石です。最後は汗だくになりながら「いっぱいとれた～」と大満足の様子。その他にも、キュウリ・ピーマン・ナス・トマトを収穫しましだが、まだ旬ではなかったので数個しかとれませんでした。収穫したものは調理して給食で出され、とっても好評なのだとか。最後に諸橋さん「みんなが毎日育ててくれたので、お芋がいっぱいとれました。次回は他のお野菜がもっと沢山収穫できると思います」園児達「ありがとうございましたー」

今回の取組は北杜市が実施している教育ファームの一部となります。北杜市すべての市立保育園で、「地域の農家さんの指導を受けて、子どもたちが土づくり、種まき、収穫までの本物の農業を体験し、食べ物の大切さや、農業の苦労や収穫の喜びを学ぶ」目的で行われています。「まだ手探りの状況ですが、育て収穫する中で、子どもたちが喜んでくれるのが嬉しいです。」（諸橋さん）「自分たちが育てているので、作物に大変興味を持つようになります。また、自分で作っている意識か、嫌いと言っている野菜も園で育てたものは食べることができるので、保護者にも好評です。」（大久保園長）

小さな農園ですが、そこからいろいろなものが育っていく、無限の可能性を感じました。

＃中北バトン

様々な立場から、子どもたちへの思い、地域への思いを語っていただきます。

≪中央市子どもクラブ親睦球技大会事業の変遷について≫

中央市子どもクラブ指導者連絡協議会　会長　佐々木弘一

子どもクラブ親睦球技大会の事業として、過去には男子が「ソフトボール」女子は「ミニソフトバレーボール」を実施していました。しかし、多くある自治会からの参加希望が数自治会という年度が続きました。事務局としても一考するべき時が来たとして内容を変更するに至りました。

近隣の市町村からの情報を聞き取りながら、子どもクラブ指導員には数回夜の会議に参集をしてもらいました。基本は対象が児童・生徒であることから、それほど難しくなく誰でもが取り組むことができるスポーツを考えた結果、「ドッジボール大会」が良いという意見が出ました。ただ、あまりオフィシャルにとらわれず中央市ルールで少し柔らかくしたものにしました。

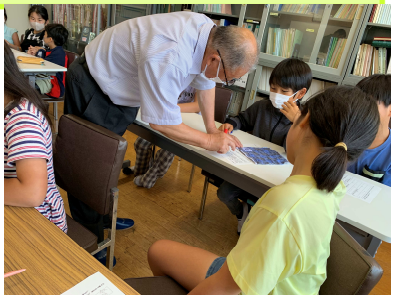
その結果、参加が１３自治会、参加者が３００人を超える人数が集まりました。会場は小学校の体育館とトレーニングセンターとの２会場を使用し大盛況でした。７年間も続きました。しかし、この事業も新型コロナウイルスの影響を受け、突然の中止を余儀なくされました。

事務局としても、夏休み期間中に出来る競技を考えたところ、市内にボウリング場があることから、一案としてボウリング大会が浮上しました。内容は、小学校低学年の部・高学年の部・中学校の部とし、合計１０７人の参加者があり会場は貸し切りで使用することができました。参加した児童・生徒そして保護者からは「楽しかった」「来年も参加したい」等の意見がありました。

子ども達の楽しそうな笑顔をみるとこの事業を実施して良かったと実感しています。

脈々と続く「歌」のDNA

甲府市立中道南小学校



「今年も短歌の季節がやってきました」講師の榛原豊明先生（以下先生）が切り出す。中道南小（大森竹仁校長）で７月に行われた短歌教室。３・４年生、５・６年生それぞれで２校時分を使って短歌を仕上げます。先生は望郷の歌人・山崎方代が中道南小出身であることや、その存在から、短歌を知らずして卒業してほしくないとの想いを児童に伝えます。児童に短歌を詠ませ、それに解説や情景を加えて、冗談を交えつつ鑑賞していきます。言葉からイメージを膨らませる大切さや、「かっこいい」を使うなど、今風にアレンジします。

後半は短歌つくり。先生が「風鈴から連想してみて」、児童達は「ガラス」「風」「夏」「涼しい」etc.…先生も「こんなのは？」などと巧みに言葉を紡ぎ、出た断片を５文字や７文字にして、瞬く間に一首完成。凄い。今度は児童が先生作のプリントを使い自らテーマを設定し、そこから自由に言葉を連想させ書き留め、進めていきます。児童の動きは、悩みながら・相談しながら・どんどん書き出す・あまり動きのない、など多様です。先生のアドバイスを熱心に受ける児童がいる中で、終了間際まで白紙に近いようなプリントも… 二首目に取り組む児童もいます。さあ、提出、となった時には全員一首以上できていました。作業感がなくとも、頭の中でできているほど歌が浸透しているのだと感心。「第22回方代の里なかみち短歌大会」でも結果が期待できそうです。　このときの作品を紹介します。　● かたつむり仲良しなのはアジサイだ二人はちょっとはずかしがりや（４年児童）　● あじさいの小さなしずくに陽が当たる夏を感じた学校帰り　（５年児童）

「私が中道南小校長の時、鎌倉の方代研究者で歌人の大下一真氏を招いた短歌教室がきっかけ。退職後、専門ではなかったが工夫して短歌教室を十数年続けています。短歌づくりは難しく、教室の前の晩は準備で寝られないほどだが、この地域での短歌の伝統を守るため取り組んでいます」（榛原先生）「県下でもこれだけの時間で短歌を作ってしまえる児童は殆どいないと思います。地域との一体化、学校の特色としてこれからも大切に守っていきたいです。」（大森校長）　そう、DNAは受け継がれるべくして受け継がれてゆくのです。

高らかに響け！伝統の歌声「ハレルヤ」

南アルプス市立白根巨摩中学校

明るく、大切に使われている綺麗な体育館に全校生徒と多くの保護者を集め、白根巨摩中学校（笹本忠彦校長）で全校合唱集会が７月１１日に行われました。３年生は「ハレルヤ」を歌う伝統があるのですが、現３年生はコロナ禍で先輩の歌声も聞いたことがなく、手探りの伝統継承です。笹本校長の「聴く耳」の挨拶に始まり、生徒の返事が半端なく心地よく響きます。１年生は「大切なもの」を若々しく綺麗に響かせました。２年生は「群青」でちょっと大人になった落ち着いた声で、少しせつなく美しく歌います。３年生の「ハレルヤ」の混声４部は男子の努力、女子の伸びやかな歌声と共に体育館が至福の音に包まれました。全校合唱の「翼をください」は中学生が歌うと本当に素敵に響きますね。全体のバランスの良さが共通項。特に３年生の成果は、音楽の岩間綾先生（今年度新採用）が専門の声楽指導の能力を生かし、生徒と近い関係から熱心に指導された賜なのですが、実はさらに強力なスパイスがあるのです。それは講師である埴原美枝子先生の存在です。

埴原先生は昭和７年生まれ。昭和３２年より巨摩中に赴任し、長きにわたって音楽指導をされ、巨摩中の伝統を築き上げました。「ハレルヤ」は埴原先生が昭和４３年から始め，現在に至る伝統曲となっているのです。先生の生徒への指導のアプローチは、技術よりか気持ちを合わせることが大切、合唱（歌うこと）をリラックスして楽しんでほしい、といった本当に温かいものです。当然講評も「今まで一番よかった」と満点超えが連発。指揮者・伴奏者をねぎらうことも忘れません。とにかく褒めちぎります。このような先生の姿勢に感化され、この合唱の伝統があるのですね。（当然、家庭や先生方の存在は言うに及ばずですが）

今回の３年生の歌声は、皆を幸せにし、２年生に「凄かったけど、自分たちはもっと上手に歌ってみせる」と思わせたに違いありません。伝統がつくられていく瞬間をみさせて貰ったすがすがしい気持ちになりました。植原先生は今年度も南アルプス市内９校の合唱指導を務めており、地域に根ざし、地域を創り、地域を支え共に生きておられます。このような人物一人一人が地域の魅力をつくっていることを改めて感じました。